

## 2005年「愛知万博」を振り返る

大阪・関西万博開幕まで1年半を切るなかで、本当に開催できるのか、中止や延期を求める声も高まっている。2005年の「愛知万博」について質問されることも多くなり、『カジノ・万博で大阪が壊れる—維新による経済・生活大破壊』（あけび書房、2022年6月）の拙稿を抜粋して紹介する。

愛知万博のような国家プロジェクトが、これほど迷走を続けたのも珍しい。万博構想はバブル全盛期の1988年10月に突如、愛知県から発表されました。ちょうど名古屋市が招致に失敗したオリンピックが、ソウルで華々しく開催された頃です。会場候補地は一方的に名古屋の中心から東へ20キロの瀬戸市南東部とされ、その後なりふりかまわず誘致活動が進められます。

会場候補地一帯は「海上(かいしよ)の森」と呼ばれ、豊かな生態系が残る里山であり、自然観察を続けてきた地元住民から抗議の声があがります。愛知県によれば、会場候補地は県有林が多く、跡地利用を含め大規模な地域開発が可能とのことでした。「海上の森」での万博開催反対の世論は、日本野鳥の会などの国内団体から、国際的な環境団体へと広がります。こうした国内外の声が、BIEにも届けられました。万博開催の是非を問う、「県民投票条例」制定を求める直接請求運動も展開されます。

1997年6月に誘致「決定」となるが、12月に「愛知万博の環境アセスメントに意見する市民の会」が結成されるなど、万博会場をめぐる運動は広がっていきます。「市民の会」は万博アセスメントについて、博覧会協会や環境庁などに意見するなど、地元市民が専門家と連携して活動しました。99年春に会場予定地でオオタカの営巣が見つかり、会場計画が大幅に縮小されます。そして2000年1月、BIE首脳が万博計画、とりわけ跡地開発を「博覧会の理念とは対極にある」と糾弾していたことが大きく報じられました。

博覧会協会は万博計画の抜本的見直しのため、BIEへの登録を延期して、「愛知万博検討会議」が設置されます。その結論を踏まえて、会場計画が新たに策定され、メイン会場は愛知青少年公園に変更されます。万博のテーマとして環境問題を前面に打ち出し、万博開催前から市民参加が重視されることとなります。こうして紆余曲折を経て策定された万博計画案をBIEに登録申請して、愛知万博は正式に承認されます。誘致決定から3年半の月日が流れていました。

愛知万博と大阪万博には共通点があります。いずれも五輪招致に失敗。愛知は空港や住宅開発、大阪はIRという名のカジノ、ともに大規模開発と万博が密接な関係にあります。「自然の叡智」を掲げた愛知が里山開発への批判から会場変更を余議なくされたように、「心身の健康」を掲げる大阪もまた、ギャンブル依存症の問題と隣り合わせという万博テーマとの「矛盾」です。

(2023年10月30日)